慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.237- 239
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0237

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

報告

前会長、西岡秀雄氏は昭和五四年三月をもって慶応義塾大学を停年退職され、前会長、中井信彦氏は、昭和五六年三月をもって同じく停年退職されました。本会に対する御指導に対し、深く感謝の意を表わしたいと存じます。

訃報　本会前委員、田中荊三氏（慶応義塾大学名誉教授）には、昭和五四年一二月一二日に逝去されました。御冥福をお祈りする次第です。

また、本会前会長、松本信広氏（慶応義塾大学名誉教授）には、昭和五六年三月四日に逝去されました。御冥福をお祈りする次第です。尚、葬儀に際し本会より次の弔辞を霊前に捧げました。

弔辞

私どもの等しく尊敬する松本信広先生に謹んで弔辞を申しあげます。

思えば一昨々年の八月のことでした。ことのほか暑い夏でしたが、先生は、八十の坂を越えられてなお六十年一日の如く三田の山にのぼり、学術研究に身を挺しておられました。折しも、先生のご研究の集大成である『日本民族文化の起源』三巻の刊行が緒についたところで、先生はみずから図書館の四階の焦げるように熱い屋根裏の部屋にあがられて、そこに架蔵されている原典の漢籍にあたっておられました。そのお姿を拝見したのが三田の山で先生をお見かけした最後になってしまいました。その二ケ月後、不死身とさえみえた先生は、思いもよらず病いに倒れられたのであります。

先生は若くして中国古代史の研究を志されました。長く中国史はいわゆる支那史であって、伝統的な経学に支配されるところ大でありましたが、先生はこの支那史に民族、民俗、言語、人類、考古、宗教、社会等の諸学問を用いられて新しい方法を考えられ、また中国の古代を解明するためにヴェトナムを主として広く東南アジアの民族と歴史を研究するという新分野を切り開かれました。当時東洋学にこのような異なった視点から光を投じた先生は、パリのソルボンヌに留学されていっそうその学問に磨きをかけられ、日本語と東洋諸国語の関係、並びに日本神話について論ずる二大論文がその地で堂々と認められて、三十歳の若さで日本人で最初の、しかも爾後十年余も得る者のなかった、フランスの国家学位を受けて帰朝されたのであります。

わが慶応義塾史学科は田中萃一郎先生によって築かれ、あとを継ぐ諸先生によって史学界に新風を吹きこんでまいりましたが、先生もまたこのような学風をもって史学科を支えてこられました。先生は創設以来三田史学会の発展にも力を尽くし、機関誌『史学』の創刊に参加されて、その卓越した業績を終始発表されて、三田史学会を今日あらしめたのであります。

先生亡きあと、偉大な指導者を失って私どもは途方に暮れておりますが、先生のご遺志をつぎ、先生の教えられた学問をさらに発展させるように全力を尽くすことが先生の学恩に報いる唯一の

道であるということを心に固く誓うものであります。

謹んで先生の御冥福をお祈り申上げます。

昭和五十六年三月十一日

三田史学会会長　神山四郎

西岡秀雄先生と私の思い出

清水潤三

西岡先生に初めて出会ったのは旧制予科一年に進んだ四月初授業の教室であるから、実に四十余年いや五十年になろうという大昔のことであった。彼はわたくしより若干年長であるから既に塾の教員ではないし、当方も本誌が刊行される頃には停年も目前であろう。ただ初めて教室で顔を合わせた時から彼はタダのムジナではないことが明白で、大学の六年間を常に畏敬の心と共に過したことであった。その頃君は既に日本人類学会の会員として偉い先生方とも交際を持ち、将来考古学で名を為すことを自他ともに疑わぬという有様で、駈け出しのわたくしは常にお弟子さんの一人に過ぎなかったといえる。

その頃の懐かしい思出に日吉キャンパスの寄宿舎の手前で発見された弥生時代竪穴住居址群の発掘調査があり、工学部のある矢上台地の東南にあたる加瀬山白山古墳や日吉駅北東の矢上古墳の発掘があった。これら連年の調査が本塾における考古学の研究を確立したわけで、間崎万里、松本芳夫、松本信広、橋本増吉、柴田常恵、大山柏などの諸先生の御尽力と御指導の然らしむるところと云うべきではあるが、西岡君が自ら身につけた実力を発揮しわれわれの牽引車として先頭に立ったことを忘れるべきではなかろう。わたくしはその忠実な補助者であったにすぎず、彼は恐らくいつまでも塾における考古学研究の先達を勤めたに相違ない。

しかし、かの未曽有の大戦は私どもの運命をかえてしまった。補充兵の一兵卒にすぎなかったわたくしは、終戦後十ケ月で塾に戻り、助手の仕事を続けることができたのに、君は航空隊の将校でエラすぎたため何年もいわゆる仏印から戻って来なかった。そのためにわたくしが藤田亮策先生を迎えて塾の考古学の再建と発展が計られる時期に力を尽すことができ、松本信広先生の片腕の役目を仰せつかった。

ただ西岡君も唯のムジナではない。アメリカで発達しつつあった「人文地理学」の講義を引き受ける者がない時に、敢然として未知の分野に突入して、その途の第一人者になられた。ここに実は今まで人に語ったことのない秘話がある。或る日間崎先生に呼び出されて人文地理の授業を受け持つように命ぜられたのは、外でもないわたくしであった。ビックリしたわたくしは英語力の不足を理由に御再考をお願いして、西岡君のほかに適任者はないと御返事したのであった。それから間もなく某先生から、そのような不遜な態度をとる者は首だぞとおどかされたが、某先生も今や此の世の人ではない。時の流れは恐ろしいものである。

申すまでもなく西岡君は私の懇請を容れて人文地理学を担当され、独自の境地を拓かれた。わたくしが西岡君の融通無碍の特殊な才能を信頼したことが誤りではなかったことが美事に証明されたと思っている。その西岡君の姿を停年のためとは云え、一昨年

の春にわれわれのキャムパスから失ったことは、まさに塾の損失であると云えよう。同時に大田区立博物館長として君の才が遺憾なく発揮されている今日、私としては心から祝福の辞をおくるとともに、何か肩の荷がおりたような気もするのである。今後の末永き御発展をお祈りしつつ筆をおくことにしたい。

学位論文審査報告

中井信彦氏提出学位請求論文

歴史学の方法と基準

本論文は昭和四八年に刊行された同名の著書である。著者は幕藩制の研究を始め近世社会史・経済史の領域に数多くの卓抜な業績をあげて既に学界に令名高い国史学者であるが、その長い研究生活の途上において自らの歴史叙述の方法と原理を一つの理論として世に問うたのが本書である。尨大な史料を扱って具体的な史実の再構成に専念している歴史家が理論書を書くことは稀であるが、著者は敢えてそれを試みた。その執筆の動機は著者自身のことばが語って余すところがない。「歴史家の仕事は、それ自身としては職人仕事である。だから、理屈ばったことは、どうしてもにがてになる。だからといって、理屈ぬきでやっているわけではない。理屈をおもてだてるのはやっかいであるし、おもてだてぬ方が安全でもあるのである。けれども、だれもが一度はおもてにだしてみるべきものであると思う。歴史家の場合、理屈が先行するのではない。先行する——先学の理屈によりながら行なう個別の仕事のなかから、途中から形をとりだしてくるのである。それは、当然、暫定的なものであり、その後の個別な仕事を通して、つくり変えられていくのはずのものである。」こういう理論構成の仕方であるから、その理論は完結するものではないが、それが理論的整合性をもち、体系に破綻がなく、その一般化命題が普遍的妥当性を有するなら、独自に評価さるべきである。著者はすぐれた歴史記述家であるが、同時に強い理論志向ももっている。それに自らの学的生命を賭けているかにみえる気魄を示している。従ってわれわれの審査は、著者の尨大な歴史叙述にこの理論がどう適用されているかという点の検討は省略しても、対象を本書一冊に限ってその理論書としての価値を検討することで十分果たされると思う。

さて本論に入ろう。本書は第一部「柳田国男の歴史学」と第二部「歴史学的方法の基準」（この題名はデュルケームを連想させる）という二部から成っている。この構成は一見奇異である。一つの前提または原理から演繹的に展開してゆく理論構成もあるが、本書はそれとは違って、柳田、デュルケーム、オットー、M・ウェーバー、マルクス等異種の理論を縫り合わせて「歴史学的方法」という一本の縄をなうような構成の仕方をしている。従って著者の理論展開に沿ってそれら諸理論の位置付けを見るしかない。まず第一部において柳田国男の著作から人類学・民俗学ではなく歴史学の方法を読み取ったこと自体がユニークな解釈である。それ